青山経営論集
第42巻 別冊
2007年12月

論文

ディアスポラの軌跡をたどって——シュテトルより郊外へ

佐川　和茂

キーワード

差別と迫害
高度な精神生活
不運な人
義人
イーストサイド
発展の鍵
平等に競える条件
批判的な継承

目次

はじめに
1．シュテトルの状況とは
2．イディッシュ文学のテーマ
3．ハシディズムとは
4．アメリカへの移住
5．ユダヤ系アメリカ人の達成とは
6．シュテトルより郊外へ
参考文献

はじめに

1881年より1923年にかけて200万人ものユダヤ移民が東欧やロシアより渡米した。それは迫害より逃れ、閉塞的な状況より脱し、精神的にも経済的にも少しでも恵まれた生活を求める移動であった。差別と迫害に満ちたユダヤ史を振り返るならば、それは、ローマ軍にユダヤ神殿を破壊されて始まった紀元70年の流浪、そしてスペインを追放されて生じた1492年のディアスポラにも比較されうる大移動ではなかったか。

本論では、ユダヤ人たちが、渡米以前に居住していた東欧諸国の小さなユダヤ人町（シュテトル）の状況を眺め、シュテトルよりアメリカ郊外へ至るユダヤ移民の軌跡をたどる。彼らにとって移住の苦難、新しい生活を求める奮闘、具体的な達成はいかなるものであったのか。少数民族ユダヤ人は、いかにして他の移民集団より早くアメリカで中・上流階級へ昇ることが可能になったのか。また、今後、イスラエルとの関わりを含めて、ユダヤ系アメリカ人の将来はどのように変容していくのか。これらの問いを、ユダヤ系文学作品と絡めてたどっていくことにしたい。

1．シュテトルの状況とは

それではまず、東欧諸国に散在したシュテトルは、いかなる状況にあったのか。たとえば、イスラエル・ジョシュア・シンガーの『失われた世界』（*Of a World That Is No More*）によれば、ユダヤ人たちは封建領主より貧しい砂地を借り受け、そこでユダヤ教会堂（シナゴーグ）や市場を中心に据えた40家族、200人ほどのシュテトルを形成した。

差別や迫害に苦しむユダヤ人にとって、シュテトルは一種の隔絶された社会であった。そこでは戒律を重視し、聖典学習を重んじ、神との対話に明け暮れ、日常生活を聖なるものに変えようとする努力が続けられた。物質的には窮乏の生活であったが、精神的にはきわめて高度な水準に達していた。シュテトルの周辺に住む農民たちが無学文盲であり、ヨーロッパ諸国の識字率が極めて低かった時代である。このような隔絶された世界で高度な精神生活を営むことは、流浪の少数民族ユダヤ人独特のものであった。

しかし、シュテトルの住民は土地所有を禁じられ、ささやかな手仕事や零細な商いを除いて有効な生計手段を絶たれた結果、三分の一が乞食であり、富者と貧者の間にも大差はなかった。実際、貧富の差は、金曜日の日没より土曜日の日没にかけた安息日に着る衣服を持っているか否かの違いであった。『屋根の上のバイオリン弾き』の原作者ショレム・アレイヘムが述べるように、「シュテトルの金持ち連中でさえ・・・貧困すれすれであった」（*Inside Kasrilevke* 150）。

利益追求の事業を企てることが困難な状況では、それに代わって聖書や聖書注解

タルムードを基盤とした学問が尊重されていく。親は娘を学問ある男性に嫁がせ、夫となった男性のさらなる学業を援助することが善行とみなされた。ただし、アイザック・バシェヴィス・シンガーの短編（“Yentl the Yeshiva Boy”）にも見られるように、女性が男性のように聖典を学ぶことは奨励されておらず、女性はむしろ生活費を稼ぎ、夫の学問を援助することが望ましいとされた。結婚相手は、しばしば当事者の気持ちと関わりなく両親や仲介人によって決定されたが、学問に打ち込む「痩せて青白い男性が好ましい」（*From Shtetl to Suburbia* 47）と考えられた。

そこで旧世界ヨーロッパを離れ新世界アメリカで学問に奮闘するメアリー・アンティンの『約束の地』（*The Promised Land* ）を眺めてみよう。そこでは、渡米以前に住んでいたユダヤ人強制集住地域の内部が、生々しく描写されている。それは、ユダヤ人に対する種々の不公平税制、異教徒の生活を強要される長期兵役制度、そして政府が裏で糸を引く組織的虐殺（ポグロム）におびえる悲惨な状況であった。狭い地域に囚人のごとく押し込められたユダヤ人たちは、苦境を生き抜くために、膨大な肉体的・経済的犠牲を払い、異教徒の強いるキリスト教への改宗を拒み、独自の生き方に固執していく。

中世的迷信や女性蔑視を含む厳格な階級制度のはびこる集住地域の内部では、反面、戒律遵守による強固な壁が築かれている。そこでは、戒律の学習が最重要の仕事であり、戒律に習熟すれば、社会の階段を昇ることも可能であった。ユダヤ人は、戒律に従って生き、神とともになすべき業を求め、いつの日か「約束の地」に帰らんと憧れ、迫害に耐え抜くのである。

したがって、数百年に及ぶ東欧シュテトルの世界では、日常用語としてイディッシュ語が、そして学問用語としてヘブライ語が用いられ、シナゴーグや家庭を中心とした精神の絆が維持されていたが、その反面、迫害される運命をも共有していた。やがて啓蒙運動（ハスカラ）や、パレスチナにユダヤ人国家建設を目指すシオニズムや、そして社会主義などが興ってくる。そうした変容する内外の圧力にさらされ、人々はまさにショレム・アレイヘムが描いた「屋根の上のバイオリン弾き」のように、不安定な場所で人間的な調べを奏でようと苦闘していたわけである。

男子は3歳頃より幼年学校（ヘデル）へ通い、朝の8時より夜の8時まで聖典学習に明け暮れた。極端な貧しさの中で暮らす人々は、神を生きた存在とみなし、神と一対一で語り、神に対してさえ抗議を行なう。新聞のない社会で聖書を日々愛読し、聖書の過去と比較して流浪の境遇を嘆き、救世主（メシア）を待望した。禁欲主義の許されない厳しさを生き、不法のまかり通る世間に対して戒律を守り、限定された環境で暮らしながらタルムードの世界に憩いを求めた。それは、周囲の貧しい農民たちと比べても物質的には改善の余地ない世界であり、神に選ばれた選民でありながら社会の最底辺で呻吟する日々であった。この矛盾に満ちた状況を彼らはユー

モアで表現したが、それは自らをあざけり、もろもろの衝撃を抑えようとするユダヤ人独特のユーモアであった。さらに、バーナード・マラマッドが『アシスタント』(*The Assistant*) で強調するように、じっと耐え忍び待つ姿勢、まさにマハトマ・ガンジーにも似た非暴力の抵抗、がはぐくまれていった。「シュテトルでは、そのような生活様式が日常の生き方として広く受け入れられていたのである」(*Someday the Rabbi Will Leave* 20)。

しかし、18世紀後半のユダヤ教活性化の動き（ハシディズム）や、19世紀のハスカラやシオニズムや社会主義は、ユダヤ人大衆に環境改善の可能性を認識させた。いっぽうで19世紀後半よりますますシュテトルの貧困が悪化し、ユダヤ共同体の自助組織にも限界が見えてくる頃、パレスチナではなく、アメリカに避難場所を求めようとする機運が高まってくる。初期にシオニズムを提唱したレオン・ピンスカーらが指摘したように、「反ユダヤ主義は治癒の見込みのない病であり」(*World of Our Fathers* 25)、シオニズム世界機構を構築したテオドール・ヘルツルが述べたように、「人は環境を変えてこそ新たに生きるのである」(*The Diaries of Theodor Herzl* 318)。

2．イディッシュ文学のテーマ

孤立と貧乏と暴力で萎えたシュテトルの精神を活性化し、ユダヤ人の存続を求めようと奮闘したのが、シュテトルで誕生したイディッシュ文学のテーマであった。イディッシュ文学の古典的な3作家の作品を眺めてみよう。

まず、メンデレ・モイヘル・スフォリム（書籍行商人メンデレ）は、富者が貧者を食い物にする例（*Fishke the Lame*)、そして小市民（リトル・マン）やユダヤ人のアンチ・ヒーローを描くことによって、シュテトルの現状を風刺し批判した(*The Brief Travels of Benjamin the Third*)。また、不運な人（シュレミール）や霞を食べて生きるように貧しい人（ルフトメンシュ）を通してシュテトルを正確に描写した。彼の作品に窺える乞食を探求者と見なす思想は興味深いが、現代の作家エリ・ヴィーゼルにも『エルサレムの乞食』(*A Beggar in Jerusalem*) と題された作品がある。

また、イディッシュ語の挨拶表現を筆名としたショレム・アレイヘムは、近代において家族がその伝統や価値観とともに変容を遂げていく様子を描いた。さらに、子供時代の回想、世代間の葛藤と家族の崩壊、ポグロムや反ユダヤ法など一連の迫害、シュテトルの進み行く崩壊とルーツを拾ってアメリカで約束の地を探す過程をつづった。

たとえば、彼は、シュテトルの平凡なユダヤ人である牛乳屋テヴィエを主人公とした物語（*Tevye's Daughters*）を通して、変容する家族の危機を描写した。テヴィ

エは神と一対一で対話し、つらいときにさえユーモアを忘れないが、外部の変容を把握できず、子供たちの世界も彼には理解しがたい。

長女ツァイトルは、結婚仲介人の薦めを断わり、自らが選んだ貧しい仕立て屋モッテルと結婚するが、これによってユダヤの伝統が壊れる。次女ホーデルは、貧しいタバコつくりの息子であり、外部で教育を受けて過激な社会主義者となったパーチクと愛し合い、反政府活動の結果シベリヤ送りとなった彼の後を追っていく。さらに、シャヴァは異教徒の男性と結婚し、ベイリクは裕福ではあるがユダヤ教にほとんど無知な男性と結ばれていく。

やがて妻ゴールディが亡くなり、テヴィエは一人で激動に対処しなければならないが、過去にも未来にも自己のアイデンティティを求めることができない。変容期にあるテヴィエとその家族の物語は、シュテトルの多くの家庭で繰り返されたものであり、その問題は移民を経てアメリカに持ち越されていく。

そして、都市の洗練された読者を対象としたＩ．Ｌ．ペレツは、ポーランドのシュテトルの思想と、神秘主義やハシディズムの幻想とを交えて独特の物語（*Selected Stories*）を編んだ。彼はワルシャワの都市文化と、ユダヤ民話やハシディズムの伝承を作品化することによって、ユダヤの伝統を洗練し後世に橋渡しをする。ペレツのよく知られた短編「沈黙の人ボンチャ」（“Bontsha the Silent”）の主人公は、誰にも知られず生きて影のように世を去る。不平ひとつ漏らさず苦難の人生を全うする。虚偽の現世では理解されなかった彼の力は、しかし天上の世界で報われていくのである。ボンチャの無抵抗主義の利点を認めながらも批判するのが今日の意見であろうが、それが当時ユダヤ人の歩まざるを得ない生き方であったのかもしれない。

さらに、「沈黙の人ボンチャ」を発展させたアイザック・バシェヴィス・シンガーの「ばか者ギンペル」（“Gimpel the Fool”）は、人間の無知や野蛮性を描き、シュテトルの相互扶助精神を交えながら、より広大な世界で人間性を再吟味する名作である。また、シンガーの「小さな靴職人たち」（“The Little Shoemakers”）は、旧世界から新世界への移動を物語る。苦難を経た主人公は、職業に誇りを抱き、理解ある子供たちに囲まれて幸せな老後を過ごす。この作品は、アメリカで生きるユダヤ人を励ますことであろう。対照的に、ショレム・アッシュの「静かな庭の片隅」（“A Quiet Garden Spot”）では、年老いた親が子供たちの間をたらいまわしにされて、この世を去っていく。

イディッシュ文学に描かれ、シュテトルのユダヤ人を象徴する不運な人（シュレミール）は、渡米して不可解な異文化を体験し、不正、貧困、屈辱にユーモアで対応しながら、混沌状況でさまざまなドラマを展開していくのである（*The Schlemiel Comes to America*）。

3．ハシディズムとは

それでは、東欧のユダヤ人が信奉したハシディズムには、いかなる特質があったのか。

18世紀の乱れたポーランドにおいて、精神的な指導者であるはずのラビや宗教学者たちは、自らの虚栄心を満たすだけの聖典学習に明け暮れ、私利私欲に走り、民衆を無視して自己の救済のみを求めていた。こうした状況に起因して、聖典研究の衰退や共同体の分裂が生じたとき、義人（ザディック）と呼ばれる新しい精神的な指導者を中心としてハシディズムが興ったのである。それは聖なる歓喜、歌や踊り、神の存在の再認識を通してユダヤ教に活を与えようとした運動であり、一般大衆に熱狂的に支持されていった（*The Zaddik*）。

アラン・ウンターマンは、『ユダヤ人――その信仰と生活』において言う。「ハシディズムは、東ヨーロッパのユダヤ人大衆の枯渇した精神を蘇らせた。宗教思想を教える手段として用いた物語の小編や寓話は、ユダヤ民族の創造性を生み出す母体にもなった」（165）と。

そして、ユダヤ神学者マルチン・ブーバーは、『ハシディズムと現代人』（*Hasidism & Modern Man*）の中で次のように解説している。

天地創造の際、そのあまりの圧力によって創造の器より飛び散った聖なる光は、万物に含まれている。人は聖なる気持ちを抱いて万物に接することによって、そこに封じ込められている光を解放するのである（32、36－7）。

外部における争いの源は、内部の葛藤であるから、思想、言語、行動に関してまず我が身を正し、そのうえで世間に対処せよ。そして世間との関わりにおいて自己を深化させよ（156）。

ユダヤ教においては、個人の救済で終わってはならない。それをもってさらに神の国を地上に建設するのである（167）。

人が存続を充足できる場所、すなわち真に立つ場所において神を求めよ。遠方に神を希求するのではなく、今ここに与えられている場所を充実させよ。身近な生活を満たし、そこに隠された聖なる光を発掘せよ（172）。

善が無ければあらゆる知的優位性は虚無となる（235）。神に対する真の愛は、人に対する愛より始まる（237）。

ハシディズムは、アメリカのブルックリンやイスラエルのミア・シェリームなどにおいて今日も活動を継続し、ユダヤ性の維持に貢献している。

4．アメリカへの移住

さて、実際、長旅に不慣れなシュテトルの住民にとって、渡米は苦難の連続であ

った。たとえば、メアリー・アンティンにとって、大きな荷物を抱えた移動は、「月世界旅行に等しいかのように思えた」（*From Plotzk to Boston*）という。ヨーロッパの国境を越える際しばしば盗賊に襲われ、混雑した三等船室での渡航中も、ビジネスの国アメリカで果たしてユダヤ性を維持できるのかという不安がつきまとった。その上、移民は換気が悪く汚臭に満ちた三等船室で、浴室・トイレの不足やその汚濁、プライバシーの欠如、不十分な睡眠、粗末な食事、言語の混乱などに悩まされた。彼らは、次々と新たな刺激への対応を強いられて疲労困憊し、意識朦朧の状態で到着するのである。

この悲惨な状況を改善しようと東欧ユダヤ人が1902年に創設した移民援助協会ＨＩＡＳ（the Hebrew Sheltering and Immigrant Aid Society）は、船室の環境改善を訴え、24時間体制で移民を受け入れ、就職を斡旋し、アメリカでの新生活を援助した。また、ヨーロッパ諸国に向けて、信頼できる移民情報を発信した。折しも農業より工業や都市化に移行する変化の中で、スラムに群がる移民は米国民の不安を煽り、移民削減の動きが顕著となっていくが、ＨＩＡＳはそれにも抵抗していく。こうした組織的な努力の結果、世紀の変わり目までに船上での衛生環境に改善が見られ、また船舶の向上に伴って渡航日数が短縮される。「ＨＩＡＳは1914年までに全米的な連絡網と、全世界に支部を持つ組織に成長していくのである」（*World of Our Fathers* 49）。

1855年よりキャッスル・ガーデンが移民受け入れ所として設立され35年間機能し、その後、ニューヨーク湾に浮かぶエリス島が1892年から1954年にかけて、新来移民の主たる入国手続きの場所になった。およそ1200万の移民が、エリス島を通過したという。ただし、移民たちは、入国する際、いろいろと不当に扱われ、金品や持ち物を巻き上げられたりした。エリス島職員の間には腐敗がはびこっており、移民たちは換金する際に騙され、食事や電報料金などをごまかされた（*Ellis Island*）。また、身体検査を受け、眼病（トラコーマ）などの症状が判明すると、家族より引き離され、元の国へ送り返される不安もあった。エリス島で一日に検査できる移民数は5千名であったという。移民をエリス島より波止場まで運ぶフェリーは24時間体制で運航したが、波止場ではようやく到着した同胞を食い物にする悪質なユダヤ人が後を絶たなかった。たとえば、ロシア系移民の被服産業での成功を伝える『デイヴィッド・レヴィンスキーの出世』（*The Rise of David Levinsky*）においても、主人公は波止場で悪質な斡旋業者にたかられている。

波止場に到着した移民は、バッテリー公園より徒歩でイーストサイドのユダヤ人スラム地区へ向かう途中でアメリカに幻滅したかもしれない。1880年代初期のイーストサイドは、アイルランド系やドイツ系に牛耳られていた。犯罪、売春、タマニー派の腐敗政治、搾取工場、物質主義、個人主義などの悪弊によって、信仰や思想

という支えが欠けた場合、移民は精神的な混沌に陥っていく。確かに、ユダヤ移民は、ほかの移民集団と比較して、非友好的な異質世界に対応する体験を積んでいたが、たとえば「ロシアでは迫害を受けても、機械的でせわしないアメリカに比べれば、豊かな詩や音楽や感情があった」(*Memories of My Life*)。いっぽう、「石造りの安アパート(テネメント)で構成された灰色の世界イーストサイドでは、陽気の良い春の日でさえ草一本生えていない」(*How the Other Half Lives*)。テネメントのトイレは、せいぜい各階に二つであり、住居には悪臭が立ち込め、地下には窓もなかった。劣悪な環境に不慣れなため東欧ではまれであった自殺が増加し、不潔で窮屈で換気の悪いテネメントでは子供の死亡率が高い。

イーストサイドでは、生活のテンポが速く、交替勤務などによって、食事や祈りをともにしていた伝統的なユダヤ家族は崩壊していく。それに伴って、旧世界で崇められていたラビや知識人たちは、地位や自己の尊厳を奪われる。シュテトルでは戒律に従って生きるという聖なる目的のために皆で苦難を耐え忍んだが、アメリカでの苦しみは大儀の失われた個人的なものになった。後にノーベル賞作家となったアイザック・バシェヴィス・シンガーが『アメリカで迷う』(*Lost in America*)と記すように、個人はアメリカでさまよえる魂となった。

東欧よりのユダヤ移民は主として家族単位で永住を求めたが、しだいに熟練労働者や著名人や正統派信者が増加し、民族大移動の観を呈していく。彼らが差別や搾取や病気に苦しめられていた時期、先着のドイツ系ユダヤ人はすでにユダヤ教と西欧思想との折り合いをつけ、経済的にも文化的にもアメリカで地盤を築いていた。「彼らは保守派のラビを養成する神学校、改革派のラビを養成するヒブル・ユニオン・カレッジ、出版協会、歴史協会などを設立し、『ユダヤ百科事典』を編纂していた」(*World of Our Fathers* 498)。

そこで先着のドイツ系と後発の東欧系との間には、マラマッドの『アシスタント』にも窺えるように、隔たりがあり、反目もあった。ドイツ系にとって、貧しい東欧系の大量流入は負担であり、恥辱であり、彼らが築いた安全を脅かすものとみなされた。そのドイツ系が所有する搾取工場と被服産業とが結びついた結果、ニューヨークは世界屈指の安価な衣類生産地となったが、反面、東欧移民は、換気や照明に乏しく、トイレが不足し、食堂さえない劣悪な環境で日に16〜18時間の労働に明け暮れ、肺結核に苦しめられた。ただし、ドイツ系の中には、「ヘンリー・ストリート・セツルメントを創設したリリアン・ウォルドのように移民を援助した人々も存在し、またドイツ系の銀行家ヤコブ・シフは陰でウォルドを資金援助した」(*World of Our Fathers* 91)。

移民が入居したテネメントは平均して3部屋で構成され、そこへ収入を増すために間借り人も置いたため、プライバシーは皆無であった。父親は新世界で地位が下

落したが、母親は実践的な技量と豊かな感情を持って伝統に配慮しながら一家の生計を支え、家族をつなぎとめる役割を果たした。「初期の移民女性はしばしば読み書きができなかったが、その点は徐々に改善されていく」(*Immigrant Women*)。

いっぽう、伝統に縛られた旧世界では細くとも確かな生きる道が存在したが、自由な新世界に放り出されて精神の支柱を失った若者は、享楽的な人生をさまよい、世代間の確執に苦しみ、家庭が憩いの場ではなくなっていく。「旧世界では軽視されていたスポーツに関しても世代間の意見が衝突する」(*Ellis Island to Ebbets Field*)。また、若者は選民に属しているというアイデンティティを理解することができない。

若者たちはスラムや異邦人の通りでいろいろと学んでいくが、親たちは通りが子供たちを悪に誘うのではないかと心配する。若者たちは、頭脳を酷使し肉体行使を過小評価するユダヤ文化に悩まされ、プライバシーのないイーストサイドにおいて男女の交際にも苦しむ。アメリカになじめず英語の下手な移民の両親を恥じるあまり、友人を家に招くこともできない。家庭の雰囲気が耐え難いため、外でたむろする結果、世紀の変わり目より若者の非行が目立ってくる。

いっぽう、若い女性の職業として、家政婦、工場勤務、タイピスト、教員があった。彼女たちは19世紀の英文学やロシア文学によって独立心や自己主張を学ぶが、家庭では父親などの無理解に苦しむ。たとえば、アンジア・イージアスカは、移民女性の熱情をはじめて率直に作品化した(*Hungry Hearts, Bread Givers, Salome of the Tenements*)が、無理解な父親と長年にわたる確執を展開する。父親は、自らが理想とする伝統に娘が反抗する態度を見て激怒したのである。

結局、若者たちは、宗教的･道徳的な正統派ユダヤ教の影響と、実際的･非宗教的なアメリカの影響と、それら二つを否定する社会主義の影響とにはさまれながら生きることになる。親たちは「アメリカかぶれ」と嘆くが、彼らは苦しみながらもかなりの精力を傾け、大志を抱いて成功を求めているのである。

若者に対して年配のユダヤ移民は、「新来(greenhorn)」と呼ばれることを嫌うあまり、100ほどの英単語や熟語を覚え、服装をアメリカ風に変え、搾取工場で働くか、手押し車の行商人となっていく。彼らはシュテトルの世界を再現するかのように、同郷の組織を構築し、就職斡旋や娯楽の共有や冠婚葬祭などに関して助け合う。イディッシュ語新聞やイディッシュ劇場の影響を受けるが、タルムードを読む宗教的な人間としての本質を変えることが無い。テネメントの一室を用いたシナゴーグに通い、正統派ユダヤ人だけで固めたカフェに集い、アメリカの影響を受けることが少ない(*The Spirit of the Ghetto* 10-17)。

やがて戒律に反して安息日も働かざるを得ない環境に至ると、移民たちはたとえ信仰が薄れてもその香りを維持するために、せめて重要な祝祭日にはシナゴーグに

通う。1890年代以降、テネメントには小さなシナゴーグが散在し、なかには堂々としたシナゴーグも建設された。シナゴーグは次第に事業家たちに運営されるようになり、ラビは精神面を司るために雇われる形になっていく。東欧のラビは共同体の精神的な指導者であったが、アメリカではしばしば会衆に対してのみ権限を行使するようになる。

ラビ専門学校として建設されたイェシヴァ大学では、ユダヤ教に詳しく、アメリカ社会にも調和できるダイナミックな指導者の養成を目指したが、この考えは移民一世にあまり歓迎されなかった。彼らは、子どもたちのアメリカでの成功を願って必死に働いていたからである（*The Men and Women of Yeshiva*）。

結局、ユダヤ移民の発展の鍵となったものは教育であった。旧世界ではユダヤ人であったがゆえに高等教育を抑制されていたが、新世界アメリカでは自由な教育が移民の子孫にとって成功の鍵となった。そこでユダヤ移民は可能な限り、教育を受ける機会を活用したのである。

時間に余裕のない労働者にとって、週末夜に開催される講演会やコンサートは、文化的な雰囲気を醸し出し、学ぼうとする渇望を幾分満たし、娯楽ともなった。また、公立図書館を活用することも可能であった。教育への尊敬、社会改革の願望、未来世代への期待、そしてイディッシュ文化などが絡まって、移民は必死に教育を求めていく。

移民一世の教育への奮闘を描く作品（*The Education of Hyman Kaplan*）は、良心的な教師や暖かな魅力を持った夜間学校を印象付けているが、実際、厳しい現実も存在した。小学校の校舎などを夜間に使用するため、移民一世は、子供用の小さな机に身をかがめ、家族を養う悩みや搾取工場での疲労と戦いながら、昼間の授業で疲れユーモアの欠けた夜間教師の下で基礎英語を学ばねばならない。英語とアメリカの習慣を学ぶことが長年イーストサイドの課題となった。

また、夜間学校、セツルメントハウス、保育所、体育館、パブリック・フォーラムを兼ねた教育同盟（the Educational Alliance）が移民の教育を促進したが、この施設はドイツ系の援助を具現化していた。早朝の子供クラス、夜勤者用の昼間クラス、夜間の英語クラスなどが開講される。「テーブル・マナーや公園の利用法などアメリカの慣習を学ぶことも移民には一苦労であった」（*The World of Our Fathers* 234）。

初めて子供たちの登校を引率したメアリー・アンティンの父親が感激に震えたように（*The Promised Land*）、学校教育は確かな前進への道と見なされた。ユダヤ移民社会は、優れた子供たちに未来への大きな期待をかけていく。やがて「1910年、シティ・カレッジの卒業生112名の中で90名がユダヤ系となり」（*World of Our Fathers* 281）、1914年までに、ハンター・カレッジなど大学に進むイーストサイドの女性が増えていく。

5．ユダヤ系アメリカ人の達成とは

それでは、ユダヤ系アメリカ人の具体的な達成とはいかなるものであったのか。

まず、移民第二世代は、搾取工場ではなく、不動産業、保険業、商売などに進出していく。この点、アイザック・バシェヴィス・シンガーやソール・ベローが、不動産業で活躍する人々を多く登場させていることは印象的である。第一次大戦後、好況と労働運動の盛り上がりとが重なり、人々の収入が増えていく。

そこで、移民の子孫は懸命に教育に励んだ結果、医師や弁護士になる比率は非ユダヤ人の2倍となり、歯科医になる場合はほぼ3倍となった（*World of Our Fathers* 167）。アメリカで教育を受け、親たちがこうむった束縛より解放された二世や三世にいたって、窮乏からの脱出が達成されたのである。

かくしてシフ、グッゲンハイム、ウォーバーグなどのドイツ系、そして東欧系は金融業でも発展していく。ウォール街にある多くの銀行は、創立者であるユダヤ人の名前を残している。成功した金融関係者は、グッゲンハイム・ミュージアムなど博物館や学校や病院を建て、慈善や文化事業にも貢献している。

また、文学、大衆娯楽、絵画、スポーツの面でも大きな達成がなされている。

イディッシュ作家であるショレム・アレイヘム、アイザック・バシェヴィス・シンガー、そしてその兄イスラエル・ジョシュア・シンガーは、翻訳を経て英語の読者に浸透していく。1978年、アイザック・バシェヴィス・シンガーはイディッシュ作家として始めてノーベル文学賞を受賞するが、彼は、失われたシュテトルの世界、アメリカの移民社会、そして不条理の世界を描きながら、絶望のかなたに可能性を示唆するその作風によって、ホロコースト以後の世界で読者を魅了していく。

さらに、イディッシュ文化の背景も手伝って、1900年代の初めより、アル・ジョンソン、エディ・キャンター、ファニー・ブライスなど、ヴォードヴィル（歌と踊りを交えた軽喜劇）にユダヤ人の才能が発揮される。「ユダヤ人が成功するためには異教徒の二倍も努力しなければならないという通説によってか、彼らは猛烈に活動する」（*World of Our Fathers* 566）。

ブロードウェイ・ミュージカルを含めた音楽産業への貢献も顕著である。ジョージ・ガーシュウィン、アーヴィング・バーリン、レオナード・バーンシュタインやアーロン・コプランド、ピアノのウラジミール・ホロヴィッツ、バイオリンのアイザック・スターン、ジャズのベニー・グッドマン、そしてサイモンとガーファンクル、キャロル・キング、ボブ・ディランなどが大きな足跡を残している。

また、ハリウッドの有名な映画制作所は、かつて困窮移民であった東欧系が占めていく。ユダヤ系俳優として、カーク・ダグラス、ポール・ニューマン、ピーター・フォーク、ダスティン・ホフマン、ダニー・ケイ、そしてユダヤ教に改宗したマリリン・モンロー、サミー・デイヴィス・ジュニア、エリザベス・テイラーが有名

である。ウディ・アレンは、作家・コメディアン・映画制作者としてユダヤ人のアイデンティティを活用しており、映画監督ではスティーヴン・スピルバーグが著名である。

貧しい家庭の出身で画家や彫刻家を目指した若者たちは、偶像を否定する聖書の戒律や家族の反目と戦いながら自らの道を求めたが、教育同盟（the Educational Alliance）は彼らが芸術を学ぶ場所となった。東欧に存在した宗教関係の装飾品も彼らに影響を与える。ユダヤ組織の援助を受け、モダニズムの中心地パリへ修行に行く若者も現れ、彼らは協会を組織し、ユダヤ的テーマを追及していく（*World of Our Fathers* 580-1）。

スポーツの世界においては、野球選手ハンク・グリーンバーグや投手のサンディ・コウファックス、オリンピックで金メダルを獲得した水泳のマーク・スピッツや、ボクサーのバーニー・ロスなどを挙げることができる（*The Jewish Americans 99, Ellis Island to Ebbets Field*）。

初期のユダヤ系社会主義は弱いものであったが、やがてユダヤ人労働組合は、社会や政治改革に関心を広げ、1912年より16年にかけて、ユダヤ系の社会主義は絶頂期を迎え、労働運動は活況を呈していく。また、東欧系は政治体験が少なく、彼らがアメリカで政治に参与するには数十年を要したが、次第にその領域でも力を得ていく。台頭するユダヤ勢力を抑えようとする社会の動きが生じる中で、彼らは「少数民族に対する特別配慮は不要であるが、事業・教育・文化面などで平等に競える条件さえ保障されれば、十分に対応可能である、という希望や決意を表明している」（*World of Our Fathers* 411）。

『ニューヨーク・タイムズ』を含めてジャーナリズムの分野でもユダヤ系は大きな達成を遂げていく。1897年に発刊された『ジューイッシュ・デイリー・フォワード』は、ユダヤ移民に対して英語学習の重要性やアメリカ社会への同化を説き、搾取工場やスラムの状況を批判し、労働運動を守り立て、ユダヤ系社会主義の意見を表明した。1902年から1951年まで編集長を務めたエイブラハム・ケイハンは、大衆の案内役となることに尽力した。そして、アイザック・バシェヴィス・シンガーやハイム・グレイドなど優れたイディッシュ作家たちに発表の場を与え、さらに読者を対象とした身の上相談欄「手紙の束（ビンテル・ブリーフ）」を掲載して大人気を博する。

ユダヤ系作家たちの作品は、南部文学とも似て、古い世界を回想し、豊かな言語的混交を有し、伝統との乖離や疎外や喪失や再生のテーマを描く。移民初期の細部をつづるヘンリー・ロスの『眠りと呼んで』（*Call It Sleep*）や、その大きな輪郭を提示するエイブラハム・ケイハンの『ディヴィッド・レヴィンスキーの出世』は、繰り返し読まれるべき記念碑的作品である。デルモア・シュオーツは移民一世と二

世の葛藤を複眼思考で表現する。ソール・ベローはユダヤの古い道、移民の伝統、大都市の風景などを繊細な歴史感覚を持って描出している。バーナード・マラマッドは、ユダヤ的な人物像、苦難や待つことの意義、イディッシュの物語を英語で書く。フィリップ・ロスは、メンデレやシンガーとも似て、ユダヤ人の自己批判や風刺を表現し、中流の郊外族に批判の矢を向けている。

1930年代、『パーティザン・レヴュー』に集う一群の批評家、エッセイスト、ジャーナリストはニューヨーク知識人と呼ばれる。彼らはアルフレッド・ケイジンがつづるような移民体験（*A Walker in the City, Starting Out in the Thirties, New York Jew*）を共有しており、世俗的で過激な思想や、ヨーロッパ文化（マルロー、ジョイス、プルースト、エリオット、カフカ、サルトルなど）の影響を受け、広く理論を渉猟し、ホロコースト以後の世界でユダヤ性を問う。

第二次大戦後、ユダヤ系アメリカ人たちは、戦争によって失われた機会を取り戻すべく奮闘した。ホロコーストやその後のイスラエル建国も彼らにはあまり大きな影響を与えなかったかのようである。ホロコーストの意味を探求するものは少数に過ぎなかった。しかし、1960年代になって、六日戦争、アイヒマン裁判、ヴェトナム戦争の影響を受け、ホロコーストに対する関心が増していく。

やがて成功したユダヤ系アメリカ人は次第に郊外に移動し、彼らが居住していた場所には黒人やプエルトリコ人が入ってくる。

6．シュテトルより郊外へ

1880年代よりの流入に始まり、1930年代末より50年代半ばにかけて、東欧系は他のどの移民集団にも勝る速度で中・上流への階段を駆け上がる。そして二世や三世は成功の象徴として郊外に移動し、そこで新たな生き方を求めていく。郊外で豊かな物質生活を享受しつつ、ユダヤ人として過去の断片を維持しようと努めるのである。しかし、移民の雰囲気にあふれた都市で育った彼らにとって、郊外生活へ適応しようとすれば苦労が伴う。

たとえば、ブルース・ジェイ・フリードマンの『スターン』（*Stern*）を眺めてみよう。ブルックリンの3部屋で育った36歳の主人公は、妻子とともに郊外へ引っ越す計画を立てる。宅地の購入契約が成立したときに住み慣れた都市を離れる恐怖を覚え、非ユダヤ人の多く住む新たな環境を周縁人の目で眺める。最初は、部屋数の多い新居、広い芝生で妻子と戯れる。しかし、入居して一ヵ月後、毛虫の大群が植木の半分を枯らしてしまう。また、息子は遊び相手が見つからず、妻も友人ができずに気持ちが優れない。おまけに職場への通勤は往復3時間と伸びてしまう。一家は郊外で孤独な生活を強いられるが、やがて近所の異邦人が妻に対して侮辱行為を働き、そのストレスによってスターンは胃潰瘍や神経症に苦しむことになる。不条

理な状況に直面せざるを得ない郊外生活者の悲喜劇をコメディ調で描く作品である。

『スターン』に見られるように、当然、都市より郊外への移動に伴って、ユダヤ的な生活の中身が変貌する。たとえば、シナゴーグは、礼拝所、コミュニティ・センター、交際場所、日曜学校、若者の溜まり場など、近代的で多目的な場所となっていくが、ユダヤの新年（ロシュ・ハシャナー）や重要な贖罪日（ヨム・キプール）を除けば、そこへ集う人数は少ない。こうした郊外のユダヤ社会を取り巻く変容は、たとえばハリー・ケメルマンのラビ・スモール・シリーズに読み取ることができよう。ラビは、人々の宗教行事への無関心やユダヤ的な知識の貧困を陰で嘆くのである。

家庭では、ユダヤの伝統が希薄になり、宗教行事は守られず、祈りは忘れられ、ヘブライ語に無知となっていく。子どもたちは日曜学校で学ぶユダヤ的な知識と、家庭で目撃する現実との格差に不安や不信を募らせていく。そこで、人々はとりあえずシナゴーグの会衆となり、子どもたちを日曜学校へ通わせ、イスラエルに寄付し、異宗教間結婚に異を唱えるのである。成人式（バル・ミツヴァー）や結婚式は贅沢になり、カントリー・クラブや個人の住宅は豪勢になるが、そこには卑俗さが漂う。

こうして郊外のユダヤ社会は多くの批判を受けながら20世紀後半より繁栄し、さらに変貌を重ねていくことであろうが、21世紀にいかなる意味ある変容が可能であろうか。

ユダヤ系市民は彼らの利益や存続を可能にするリベラルな思想を支持し、恵まれない他の少数民族を支援する。彼らにとっての重要課題は、ホロコーストの継承、イスラエルの存続、反ユダヤ主義への対応である。1948年に誕生したイスラエルは、ホロコースト生存者や迫害を逃れるユダヤ人にとって、新しい人生を打ち立てる場所となった。彼らは、もはやさまよえるユダヤ人ではない。イスラエルは、国際的な勢力地図の中で、アメリカ軍に依存する現実路線を歩まざるを得ないが、国家となったイスラエルは、北アフリカの困窮難民に救いを差し伸べ、多数のユダヤ人をガス室に送ったアイヒマンを裁判にかけ、ロシアで迫害される同胞を救出することが可能となる。いっぽう、アメリカのユダヤ系市民にとって、共通する移民の過去や、共通するであろう危険な運命が、彼らのユダヤ性を維持するのである。彼らは皆イスラエルの存続を不可欠であると思い、アメリカにおいてさえ反ユダヤ主義が再燃するのではないかと警戒を怠らない。ブルックリンなどに住むハシディズム信者たちは、長い黒衣に身を固め、宗教的な要素を堅持している。ただし、年老いたユダヤ系市民は、社会保障によって安楽な生活を送っていても、自らの過去との乖離に寂しさを覚えるのである。

東欧移民たちは精神的にも物質的にもまともな生活を営みたいという願望が強く、それがシュテトルでの受身の生活からの脱皮や、歴史に積極的に関与したい気持ちや、政治参加や、シオニズム運動と結びついた。しかし、いっぽうで移民を結束させていた共通の生活様式や伝統や言語は変貌していく。今日の時点に立って歴史を振り返り、父祖の世界を眺めたとき、いかなる良い生活の基準をそこから学べるであろうか。移民が東欧より持ち込んだ道徳観と、アメリカでの社会改革の希望が結びついたところに望ましい生活が生まれるであろうか。そこではユダヤの古い道を重視するとともに、それを批判的に継承していく態度が求められていく。

参考文献

ウンターマン、アラン（石川耕一郎、市川裕訳）『ユダヤ人――その信仰と生活』筑摩書房、1983.

Aleichem, Sholom. *Tevye's Daughters*. New York: Crown Publishers, 1949.

――.*Inside Kasrilevke*. New York: Schocken Books, 1965.

Antin, Mary. *The Promised Land*. New Jersey: Princeton UP, 1969.

――. *From Plotzk to Boston*. New York: Markus Wiener Publishing, 1986.

Atlas, James. *Delmore Schwartz*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1977.

Benton, Barbara. *Ellis Island*. New York: Facts on File Publications, 1985.

Buber, Martin. *Hasidim & Modern Man*. New York: Horizon Press, 1958.

Cahan, Abraham. *The Rise of David Levinsky*. New York: Harper & Row, 1917.

Dresner, Samuel. *The Zaddik*. New York: Schocken Books, 1960.

Friedman, Bruce Jay. *Stern*. New York: Arbor House, 1962.

Gittleman, Sol. *From Shtetl to Suburbia*. Boston: Beacon Press, 1978.

Greenspan, Ezra. *The Schlemiel Comes to America*. Metuchen: The Scarecrow Press, 1983.

Hapgood, Hutchins. *The Sprit of the Ghetto*. Cambridge: The Belknap Press, 1967.

Hoffman, Eva. *Shtetl: The Life and Death of a Small Town and the World of Polish Jews*. New York: Houghton Mifflin Company, 1997.

Holy Bible, New King James Version. Nashville: Thomas Nelson, Inc. 1892.

Howe, Irving & Greenberg, Eliezer eds. *A Treasury of Yiddish Stories*. New York: Schocken Books, 1953.

Howe, Irving. *World of Our Fathers*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1976.

Isaacs, Ronald H. *Jewish Music*. New Jersey: Jason & Aronson, 1997.

Kazin, Alfred. *A Walker in the City*. New York: Harcourt Brace & Company, 1946.

――. *Starting Out in the Thirties*. New York: Vintage Books, 1965.

――. *New York Jew*. New York: Syracuse UP, 1978.

Kemelman, Harry. *Someday the Rabbi Will Leave*. New York: Fawcett Crest, 1985.

Levine, Peter. *Ellis Island to Ebbets Field—Sport and American Jewish Experience*. Oxford: Oxford UP, 1992.

Lowenthal, Marvin ed. *The Diaries of Theodor Herzl*. New York: The Dial Press, 1956.

Lown, Bella. *Memories of My Life: A Personal History of a Lithuanian Shtetl*. California: Pangloss Press, 1991.

Malamud, Bernard. *The Assistant*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1957.

Metzker, Isaac, ed. *A Bintel Brief*. New York: Schocken Books, 1971.

Muggamin, Howard. et. al. ed. *The Immigrant Experience—The Jewish Americans*. New York: Chelsea House Publishers, 1996.

Peretz, I. L. *Selected Stories*. New York: Schocken Books, 1974.

Riis, Jacob A. *How the Other Half Lives*. New York: Dover Publications, 1971.

Rosten, Leo. *The Education of Hyman Kaplan*. New York: Harcourt Brace Jovanovich, 1965.

Roth, Henry. *Call It Sleep*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1934.

Seller, Maxine Schwartz. *Immigrant Women*. New York: State University of New York Press, 1994.

Sforim, Mendele Moykher. *Tales of Mendele the Book Peddler*. New York: Schocken Books, 1996.

Singer, Isaac Bashevis. *An Isaac Bashevis Singer Reader*. New York: Farrar, Straus & Giroux, 1971.

——. *Lost in America*. New York: Doubleday, 1981.

Singer, Israel Joshua. *Of a World That Is No More*. New York: The Vanguard Press, 1970.

Stein, Joseph. *Fiddler on the Roof*. New York: Pocket Books, 1966.

The Talmud of Babylonia. VII: Tractate Besah. Atlanta: Scholars Press, 1986.

Wiesel, Elie. *A Beggar in Jerusalem*. New York: Schocken Books, 1970.

Yezierska, Anzia. *Bread Givers*. New York: Persea Books, 1975.

——. *Hungry Hearts and Other Stories*. New York: Persea Books, 1985.

——. *Salome of the Tenements*. Chicago: University of Illinois Press, 1995.

Zborowski, Mark & Herzog, Elizabeth. *Life with People: The Culture of the Shtetl*. New York: Schocken Books, 1995.